

# 法政大学大学院 公共政策研究科 2023公開シンポジウム報告書

未来を拓く政策系人材  
～法政大学大学院公共政策研究科のミッション～



# 開催趣旨とプログラム

## 開催趣旨

法政大学大学院公共政策研究科では教育の柱としてこれまで社会人の学び直しに取り組んできました。昨年度に設立 10 周年を迎え、これまで多くの修了生が社会で活躍しています。本シンポジウムでは、大きく移り変わる時代の中で、改めて社会人教育の過去と現在を見つめ、その未来の可能性を考えるとともに、これまでに修了した方々をはじめとする本研究科関係者が交流することで、そのつながりを再確認し今後に生かしていくことを狙いとしています。

本研究科はその前身を含め政策系社会人大学院としての歴史は長く、そのルーツは 1998 年までさかのぼります。大学院における政策系社会人教育の場を開拓し、四半世紀にわたり社会に貢献してきました。幅広い職種や年代、経験を有した方々が公共政策を学び、互いに交流できる場としての役割を果たしながら、多様なバックグラウンドを持つ修了生を多数輩出してきています。基調講演では当初の社会人大学院開設に携わられた武藤博己法政大学名誉教授をお招きして開設時の社会人教育に対する理念に立ち返りつつ、本研究科で修士号を取得した皆さんから、公共政策研究科でのリスキリングが人生でどのように役立ったのかをお話いただきます。最後にそれらを踏まえて、本研究科教員が、未来に向けた法政大学大学院公共政策研究科のミッションを語ります。

## プログラム

テーマ：『未来を拓く政策系人材～法政大学大学院公共政策研究科のミッション～』

日時：2023 年 11 月 25 日（土）14:00～17:10

場所：法政大学市ヶ谷キャンパス 富士見ゲート 2F G201 教室

### 14:00～14:15 開会・挨拶

開会 高田 雅之（公共政策研究科長）

挨拶 廣瀬 克哉（法政大学総長）

### 14:15～15:15 第 1 部 基調講演

「政策研究プログラムから公共政策研究科へ

—法政大学における政策系社会人大学院の軌跡」

武藤 博己（法政大学名誉教授）

15:30～16:40 第2部 修了生によるパネルセッション

「先端の学び、研究、広がるつながり：法政大学大学院公共政策研究科の軌跡と展望」  
パネリスト

田中 克弥（さいたま市職員）

中川 貴久美（駐日欧州連合代表部 政治・広報部）

中嶋 恵（台東区議会議員）

安原 淳子（OFFICE J・Y 代表）

コーディネーター 淵元 初姫（公共政策研究科教授）

16:40～17:10 第3部 クロージングセッション

進行 小島 聡（公共政策研究科教授）

登壇者 廣瀬 克哉（法政大学総長）

中筋 直哉（公共政策研究科教授）

全体司会進行 谷本 有美子（公共政策研究科准教授）

会場設営・運営 公共政策研究科 院生会

## 開会・挨拶

### 高田 雅之（公共政策研究科長）

皆さん本日はご多忙の中、このような多くの方にご参加いただき、心よりお礼申し上げます。公共政策研究科長を務めます高田です。シンポジウムの開催にあたりまして一言ご挨拶申し上げます。

2012年に複数の研究科が合同し、公共政策研究科ができ、昨年で10周年となり、一昨年、昨年と記念のシンポジウムを開催しました。同時に本研究科の前身のひとつ環境マネジメント専攻ができてから今年で20年目の節目でもあります。また政策系社会人大学院として産声をあげてから25年目（四半世紀）となります。そこで今年は、少し趣を変えたシンポジウムを行うこととしました。と申しましても、研究科にとってとても重要な意味を込めたものと思っています。ひとつの始まりと言っても良いかもしれません。

主に2つの狙いをもってこのシンポジウムを企画しました。ひとつは、「公共政策研究」「政策系人材」の二つをキーワードとしてきた研究科の過去と今を見つめ直し、その先に目を凝らそうというものです。「公共政策」という言葉は今日広い意味に進化し、ガバメントにとどまらず企業や市民をも主体的に含み、さらにそれらを繋いでいくことも含むものとなってきました。このことは、法学部・社会学部・人間環境学部にも根をもつ3つの研究が融合していることの意味をより確かなものに行っていると考えます。

もう一つの狙いは輩出してきた人材を「資産」と考えて、教員・学生のみならず巣立った修了生とともにこれを育ていこうというものです。平たく言いますと、修了生の皆さんともっとつながっていこうということです。本研究科の最大のミッションは研究を通じた人材育成であることは疑いないものと思います。本研究科の大黒柱である社会人教育をひとつのプラットフォームとし、社会の第一線で活躍されている修了生の皆さんとのつながりを資産として価値あるものに行っていこうという、そのキックオフ的なシンポジウムをしたいと思っています。考えてみると、これまで個々の教員と修了生とのつながりはあったものの、それを横に拡げる場は必ずしもありませんでした。今後、プラットフォームづくりの中で、様々な情報を共有・交換し交流し、さらなる学びを目指す、あるいは異業種の連携につなげていければと期待しています。ここから巣立っていかれた皆さんにおいては本籍地のひとつとして原点を思い出していただく、言ってみれば「お帰りなさい」であり、教員や学生においては社会人の学び直し（リカレント教育）の羅針盤を改めて考える機会なればと思っています。

以上の趣旨から、本日のシンポジウムでは『未来を拓く政策系人材～法政大学大学院公共政策研究科のミッション～』をテーマに掲げています。この後まずは本研究科の創立と

運営指導に当初からかかわって来られた廣瀬総長からご挨拶を頂戴いたします。次いで同じく研究科開設にご尽力された武藤名誉教授より基調講演をいただきます。私が 12 年前に本大学に参りました際、紀要であります志林の創刊をご一緒させていただくなど、熱くご指導いただきました。本日はお招きできて誠に光栄です。そして本研究科を踏み台にして社会に羽ばたいていかれた 4 人の修了生、

田中 克弥さん (さいたま市職員)

中川 貴久美さん (駐日欧州連合代表部)

中嶋 恵さん (台東区議会議員)

安原 淳子さん (OFFICE J・Y 代表)

と多様なバックグラウンドをお持ちの方々をパネリストにお招きして、それぞれの視点から公共政策研究科に触れていただきつつ、ご議論いただきます。そして最後に教員サイドから本研究科の向かう先と可能性についてメッセージをいただく予定です。

本研究科のポリシーとして『公共政策課題解決に貢献する「高度専門職業人」「研究者の実務家」の育成』をホームページ等で掲げています。学問と実務をひとつのものとしてとらえる研究科と言えます。「研究を社会に生かす」と言ってしまうえば味気ないように思えますが、実際の学位のテーマ（修士・博士）は公共政策の多面性を反映して実に多彩です。そのことが、今の時代においても次の時代においても本研究科のもつ大きな魅力に変わりないと思っています。

最近ウイスキーが流行っていますが、ブレンダーと呼ばれる最高の味を引き出す職人がいます。ブレンダーの方によるとその仕事はオーケストラに例えられ、個性を引き出し、全体の調和を生むのだといいます。本研究科は政策系社会人大学院としては歴史も古く、今もフロントランナーを自負しています。社会の各分野の第一線で日々活躍される皆さんとともに、本研究科の果たすその先、いいブレンダーになるには？を考えるシンポジウムになればと思っています。簡単で恐縮ですが、開会の挨拶とさせていただきます。本日はよろしく願いいたします。

## 廣瀬 克哉（法政大学総長）

法政大学総長の廣瀬です。私は公共政策研究科に所属し、研究指導のゼミも今年度も続けております。そういう意味では、研究科の内側の視点と大学全体を代表して簡単にご挨拶させていただきたいと思いません。



全体的な視点として言うと、日本の社会科学は現場と非常に距離が大きいことが昔からよく指摘されておりました。確か 1970 年代に OECD 調査団が日本の社会科学に対する非常に厳しい、批判的な報告書を出したことがあります。一番批判されたポイントが、現場と研究、現場と大学があまりに離れていて交流がないということでした。そういう指摘を受けつつ私は、80 年代に大学院に入って本格的に政治や公共政策の勉強を始めたわけですが、アメリカあたりの論文を読むと、これこれが起こったときに実務に携わっていた経験に基づいてそれを学問的なフレームワーク、分析の枠組みに当てはめるとこういうことが検証できるのではないか、そんな論文がごろごろころがっていました。日本では、そういう論文を読んだことがありませんでした。

その後、本学に奉職をして 98 年から、私が当時所属していた研究科では、夜間、社会人の政策研究コースが始まりました。それ以降、その研究科に集った人たちや、あるいは、他大学にも類似の大学院のコースなどもどんどんできていき、そういう人たちがやがて現場の直接の経験を自ら持っていると同時に、大学院で学んで、事例報告ではなくて、本格的な研究の成果として社会に発信できるような、それがむしろ今では当たり前になってきていて、そういう経験を持つ方が、今日この中にもいらっしゃるかと思いますが、実務家としての経験を持ち、大学院での研究の経験を持ち、そして現在は大学教員として政策や、もう少し幅広いいろいろな研究に取り組んでおられる、そういう方々は決して珍しくはなくなってきました。とはいえ、まだまだ希少価値があるということでもありますが、そのことの意義は後のシンポジウムの中で触れられるかと思えます。

もう一点、少し引いた視点からは、今週、日本私立大学連盟から出された「大学院リカレント教育の再定義と再評価」という報告書です。もう間もなく私立大学連盟のホームページに公表される予定です。この中で訴えていることは、日本の大学院は少なくともこの 10 年ぐらいコンスタントに大学院進学者の率が下がってきていて、修士・博士ともに、特に人文社会系において学位を取得する人数が、人口に対する比率として先進国の中でも最低レベルという状況にあります。日本社会で、大学院の教育や、大学院に属して行う研究の意義・効果がちゃんと受け止められていないのではないかという思いで書かれた報告書と言っていいかと思えます。例えば公共政策研究科であれば、公共政策の研究、あるいは

学問として言えば公共政策学という分野の学位を出すわけですから、その分野に詳しくなる、そして特に、博士後期課程で博士の学位を取る人は博士論文では極めてピンポイントの、非常に狭い尖った研究をするわけです。これをやっていることは社会にも浸透しているわけです。博士学位を取る人はものすごく細いピンポイントのようなことをやっている人たちだからマニアックで、それ以外の分野では役に立たないといったイメージが、これは全く事実に基づかないイメージだと私は思いますが、社会的通念としてはそうなってしまっているように思います。

それに対して、この報告書が言っているのは、大学院ではそういう尖った最先端を自ら開拓する経験を通して、その領域の知見が深まっていると同時に、汎用的な能力が高まっている、そのことにも社会は目を向けるべきではないか、そのためにもこれからもっと大学院教育を日本社会のために役立てていくような仕組みを作っていくかなくてはならないのではないかと訴えています。全くそのとおりだと共感をしてこの報告書を読みました。

そしてここで、法政大学公共政策研究科で育成されていっている人たちの人材としての力も、それぞれ特に論文で取り上げられた専門領域についての深い知見と合わせて、例えば、研究プロジェクトを完成まで持っていくときのプロジェクトマネジメント、人文社会系ではほとんど個人研究ですから、自分一人でマネジメントと実行とを両立させて一定期間内で一定水準以上の研究成果をまとめることに成功して初めて学位が取れるわけです。そういうことが持っている価値を、われわれはもっと訴えて社会に浸透させていかなければならないのではないかと考えております。

最後に、日本でいろいろと社会課題、そしてそれが政策によって解決されるべきだ、あるいは、政策によらないと解決が難しいということになると、政策課題となるわけですが、それが、ともすれば印象論的な、表面的な、そして検証されていない因果関係を当たり前の前提にして、こうやれば解決するというような言説がまかり通りがちというのが現在でも、というか、ある意味メディアが発達してきた現状、より深刻になっているかもしれないと思います。

それに対して、事実に基づいて、こういうことを検証して初めてその提案されている政策が有効であるかないかの判断ができる、そういう感覚をお持ちなのはここで学ばれた皆さんの、非常に強い武器であると思います。その武器が社会において活躍の場を得て、社会的な課題が政策課題になってそして、機能する政策になっていくことの一助となることを強く願っております。そういうことに向けての現場からの報告を今日は頂けるものと、楽しみにしております。夕方まで長丁場となりますが、どうぞよろしく申し上げます。

## 第 1 部 基調講演

### 司会

ここから第 1 部、本学名誉教授の武藤博己先生による基調講演に入ります。講演者の略歴を簡単にご紹介申し上げます。武藤先生は、1985 年に本学法学部に奉職されて以来、『道路行政』や『入札改革』の出版をはじめ、行政学の分野で多数の研究業績を残されました。一方、当公共政策研究科のルーツとなる社会人大学院政策研究プログラムの立ち上げからご尽力いただき、以来、2021 年 3 月に当公共政策研究科教授として定年退職されるまでの間、社会人大学院の運営、教育に長く携わり多数の修了生を輩出して本学に多大なるご貢献を頂いております。本日は、「政策研究プログラムから公共政策研究科へ、一法政大学における政策系社会人大学院の軌跡」と題して、設立に至る経過や、当初の社会人大学院に対する理念などをあらためてお聞かせいただき、本研究科のこれからを考えるための学びの機会とさせていただきます。

### 「政策研究プログラムから公共政策研究科へ—法政大学における政策系社会人大学院の軌跡」

#### 武藤 博己（法政大学名誉教授）



ただいまご紹介いただきました、武藤博己と申します。法学部政治学科に所属していましたが、今日お話しする 1998 年から政治学専攻で始めた政策研究プログラム、そこでいろいろと工夫して社会人大学院としての体裁を整え、2008 年に政策創造研究科に移籍し、さらに 2012 年から公共政策研究科にもう一度移籍し、そしてそこで定年を迎えました。法政大学に 37 年間おりました。松下圭一先生は 48 年間おられましたからすごいですね。ほぼ半世紀です。松下先生の話はまた後ほど出てまいります。

最初に、今日は公開シンポジウムにお招きいただき心から感謝しております。退職後、公共政策研究科と関わるのはこれが初めてですので、大変うれしく思っております。昨年

9月まで、ある研究機関の所長をやっておりましたので、フリーになって1年ちょっとです。その間に、百名山の全山登頂を達成しました。43年間もかかりましたので、登山家と言うより、ハイカーの延長みたいなものですが、山の話をするのは大好きです。でも残念ですが、今日は山の話ではなくて、社会人大学院のお話です。こちら私私の人生をかけてきた大好きな話です。

まず、1990年代がどういう時代だったかを振りかえります。当時、大学にとって大きな問題は18歳人口の減少でした。18歳人口は第2次ベビーブーム以降では、1992年がピークで、その後下がり続けます。これを大学全体として危機と受け止められていました。高等教育機関への進学者は横ばいという状況でした。このことを契機として、この後お話しする大学の改革がいろいろ進んだことにより、大学に行く人が増え、大学は大競争時代に突入しました。その大きな原因の一つとして、文科省が出している大学設置基準、大学が従わなくてはいけないようなものがあり、これが91年に大綱化します。大綱化とは、細かいことを言わなくなったということです。法政大学としてもこの大綱化に従って、新学部の増設に取り組んできたわけです。1999年には国際文化学部、人間環境学部、2000年には多摩キャンパスに現代福祉学部、小金井キャンパスに情報科学部が設置されました。法政大学は現在、学部が15あり研究科も増えておりますが、その後も法政大学としては学部改革をし続けてきたと言えると思います。

この新学部が立ち上がる前に、どんな学部にするかを考えるプロジェクトが法政大学内に設置されました。私もどういいうわけか多摩のキャンパスに新学部を作るというプロジェクトに入り、そこでいろいろ議論した挙げ句、私が「ソーシャル・デザイン学部はどうか」と提案しました。これが理事や校友・OBが参加する評議員会で報告されたらしく、「ソーシャル・デザイン、よく分からないけどいいじゃないか」というようなことを言われたようです。実は、いくら何でもソーシャル・デザインではあまりにも曖昧で、よく考えれば“まちづくり”といったことになるのですが、松下先生の本の中に『都市文化をデザインする』という本があり、そこで「都市文化デザイン学部」と変えたところ、とにかくソーシャル・デザインのほうがいいということで、その当時の理事が「武藤君、多摩に行ってその設置準備委員会として頑張れ」と言うのです。私としては、プロジェクトに入ってアイデアは出したけれども、社会人大学院を設置したいという希望がありましたので、多摩に行くことへの免除を願い、理事の了解をもらったという状況でした。

そもそも、社会人大学院のアイデアはどこから来たのかということですが、私は1989年4月から1991年3月まで2年ほどイギリスに留学をしておりました。そのときにレスター大学にEU法を講義する社会人参加の大学院があり、それがどんなものか調べてきてほしいと、大学院事務課から依頼があり、それで調べに行きました。1990年の話ですが、1993年からは欧州連合、現在のEUに変わることになり、その準備として、イギリスは当時EUに加盟していましたので、EU法の勉強をしないといけないという考え方がイギ

リスの研究者・実務家の間でも認識されていました。そこで、レスター大学としては、EU法を講義する社会人参加の大学院を設置していたわけです。社会人の法律家、弁護士や裁判官、EU 関係の訴訟が起きた場合を対処するために勉強するということなのですが、その当時は遠隔教育、ディスタンス・ラーニングと言われていました。具体的にはそれがどういう方法だったのかは詳しく分からないのですが、通信教育とスクーリングで、現在の Zoom のようなものではなかったと想像します。

個人的な研究との関係では、私の博士論文はイギリスの道路行政をテーマとしており、レスター大学には交通関係の資料が多く、“Journal of Transport History”という雑誌を出していた大学で、その関係もあって図書館に資料が豊富にありました。イギリスの国会図書館 British Library、LSE の図書館よりも論文が多くて、コピーして持って帰ってきたという記憶があります。これは 1980 年のことで、博士論文の資料集めにイギリスに行ったときのことでしたから、約 10 年経ってレスター大学にもう一度行ったことになります。

法政大学では、1992 年から経営学専攻の昼夜開講のビジネススクールと、経済学研究科の昼夜開講大学院が設置されております。調査したのは 1989 年ですから、その準備を大学院事務課は進めていたのだと思います。1991 年 3 月にイギリスから戻ってきて早速、社会人大学院をどう作っていけばいいかを考えたわけです。しかしながら、その当時、政治学科は教員定員が充足していなくて、改革はできないと大学院事務課から言われ、ではまず定員充足に励まなくてはいけないということがわかり、1990 年代、何人かの先生に来ていただきました。

ここからは、政策研究プログラムの話に入っていきます。松下先生が 2000 年に退職予定で、松下先生の名前はその当時から、日本政治学会会長もされていたし、日本公共政策学会でも理事長を経験され、政治学では大変有名な先生で、私たちが多くのことを教えていただきました。1998 年までに設置しないと松下先生が非常勤扱いになってしまいますので、1998 年 4 月開講を目指して頑張りました。ところが松下先生から反対を受けました。松下先生の時代もそうだったと思いますが、大学の改革はなかなか大変で、「そんなことで苦勞することはない」と簡単に言われました。その後いろいろと議論して、とにかく松下先生からゴーサインをいただいたというわけです。

それはどういうことかという、松下先生は「4 多摩研究会」と呼びましたが、3 多摩の自治体職員と埼玉の自治体職員の方々をメンバーとして研究会をやっていました。私自身もその研究会のメンバーに入れてもらうことができ、実務家が研究するという点について大変感銘を受けました。実に面白いのです。今までの行政学は、先ほど廣瀬先生からもありましたが、現場との接触が少なく、現場のことを研究することはほとんどありませんでした。私もそうで、私の博士論文は『イギリス道路行政史』という著書になっていますが、文献調査が中心で、実際に行ってモーターウエーなどを走りましたが、それは現場とは言えず、あくまでたくさんの資料を読んだ上でまとめたものでした。その当時の先

生方の研究は外国研究が多くて、ようやく一部の大学で日本の研究が始まったばかりです。そういう状況でしたから、やはり実務との関係、実務で抱えている問題をどう解決するかが大変重要で、それは十分研究になるし、博士論文の対象にもなる、もちろん修士課程でも同様に研究が実務に役立つということに気づきました。

そして大学内での調整は、理事との話が済んでいましたので、大学院事務課も 18 歳人口減の状況を十分に理解しており、応援してくれました。社会科学研究科政治学専攻の中の大学院です。名称をどうしようかといろいろ苦労はしました。経済学研究科は「プログラム」と呼び、専攻のような形になっていて、ビジネススクールでは「コース」だったと思います。名称をどうするかもなかなか難しい状況でしたが、一応「政策研究プログラム」という名称にしました。組織形式は、政治学専攻の内部組織となりますから、設置準備で持っていった資料も厚さは 3 センチ程度のものでした。公共政策研究科のときは厚さが 10 センチを超えていたのではないかと思います、比較的簡単な書類だったと思います。

当時は、設置基準の大綱化で多くの大学が文科省に対して設置申請をしていた時期で、何回か文科省に行きました。全国の大学からの多くの大学人が控え室で待っているという状況でした。私たちもそこで待たされたことがもちろんあります。ただ、法政大学が便利なのはタクシーに乗って 15 分で文部省（当時）まで行けます。たとえば北海道の大学だと飛行機に乗って複数名が書類を抱えて文部省に説明に来るという状況から見れば、タクシー 2 台で終わってしまいます。その前の準備はもちろん大変ですが、大学院事務課が頑張ってくれました。

さてその認可が下り、改革は承認されました。モデルにしたのは大阪市立大学の「創造都市研究科」です。ところが今回、創造都市研究科について調べてみると次のように書かれていました。「大阪市立大学大学院創造都市研究科は、大阪市立大学経済学研究所を基礎とした改組により、2003 年に設立され、創造都市研究科を基礎とした改組による 2018 年度都市経営研究科の発足とともに、2016 年度に施行の 2017 年度入試をもって修士課程から募集を停止」とホームページに載っていました。2003 年だったらモデルにならないと思いました。なぜかと思ったのですが、もしかしたら、経済研究所を改組したわけですから、その経済研究所の段階で社会人の大学院をやっていた可能性があります。ただ、もう古いことですのでホームページで確認することはできませんでした。

大阪市立大学には行政学の加茂利男先生がいらっしゃって、この加茂先生と研究プロジェクトをしていて、もう 1 人のメンバーがなんと佐々木毅先生でした。3 人で京都の和室に一部屋で泊まったことがあります。いい経験でしたが、そこで加茂先生に社会人大大学院のことを尋ねてみたりしていたら、東京でもぜひやってくれということでした。法政大学ではすでに経済学と経営学がありましたが、社会科学の中でも、政治・行政系でと考えたわけです。

いよいよ、1997 年に入試を実施しました。開設前に朝日新聞で政策研究プログラムの開

講が取り上げられました。都政新報などにも広告を掲載したようにも思います。これらのことが大きく影響し、100名程度の応募がありました。100名の応募というのは大学院ではほとんどありませんでしたので、私たちも右往左往しました。どうやって書類審査を進めるのか、面接はどう組み立てるのか、今までにない経験をさせていただきました。1998年は結果として43名の合格者で、法政大学出身者は8名、明大5名、早大4名、日大4名、東大2名、名古屋大2名などでした。京大からもいました。文部省の考えでは、大学院設置の意味は、自分の大学の卒業生をちゃんと教育しなさいということでした。でも、これを見れば分かるように、法政大学の人も来てもらえましたが、他大学のほうがずっと多いわけです。翌1999年の合格者も37名おり、教員定員1名増を確保しました。大学院で入学者25人以上を2年間続けると教員定員が1名増えるというルールがあり、教員1名増を確保したことになります。

開設後、たくさん出ている大学院の案内書を見ていて分かったのは、研究科単位で大学院の説明が出ていました。ところが、法政大学は社会科学研究科の中に政治学専攻などがあり、雑誌の案内ではせいぜい1~2ページ、そこに政治学も含めいろいろな専攻が入っているわけですから、政治学専攻の説明はほんの数行です。これでは駄目だ、これではほかの大学に太刀打ちできないと考えまして、専攻を「研究科」に変更しようではないかと大学院事務や大学院委員会に申し上げたところ、同意が得られました。専攻から研究科への変更は私の提案だったのですが、社会科学研究科はなくなり、「政治学研究科」に変わりました。他の研究科もすべて同様でした。

開設後の新聞記事です。朝日新聞の記事検索で出てきました。「法政大学は昨年、経済学と経営学の二専攻だった夜間大学院に政治学専攻を加えた」（朝日新聞、1999/6/20）とあります。「公務員や非政府組織（NGO）で活動する人たちなどを対象に、やはり「通学しやすい都心の立地」をうたい文句にしている」という記事でした。また2000年11月15日の朝日新聞では天声人語で扱われました。「社会人大学院、つぎつぎ開設 仕事を終えてから授業を受けられる大学院が増えている。その一つ、東京・市ヶ谷にある法政大学の大学院。午後6時半からの「政策過程研究」。これは私が担当しており、取材を受けました。「9人の院生が参加して始まった。見学した日のテーマは「行政財産の使用許可状況」で相当に堅苦しいが、院生のほとんどが公務員であり、話は実践的でわかりやすい。最年長54歳の多田亨さんは、東京郊外の市役所に勤めている」とあります。「入学金も含め出費は百万円にもなった。むろん楽ではないが、「実務で行き詰まったときに、ここで意見を聞くだけでもプラス」このように言ってくれていたそうです。「滋賀県から夜行バスで通ってくる人もいる」と書かれていますが、確かにいましたが、残念ながらこの方は途中でやめてしまいました。この後は、大学院全体のことについて触れていてなかなか役に立つと思いますので引用します。

「大阪駅の周辺では関西大学や関西学院大学などが、やはり社会人向けの大学院をつぎ

つぎに開設した。埼玉大学は県境を越え、東京駅近くのビルで開講した。「駅前大学院」とでもいふべき現象だ。都心から郊外に移転した大学が、元の場所に大学院を設ける例も増えている。なぜ、いま社会人大学院なのだろう。18歳人口の激減で、大学の経営は容易でない。社会に出た人々を呼び戻せば新しい市場が開拓できるし、知名度も上がる。一方で、企業が一生面倒を見てくれる時代は終わった。年功序列を超えた実力を、と望む社員が増えている。学位を取ればなお有利だ。文部省も設置基準を緩めるといった方法で後押しした。」

最後も結構面白い内容です。「これまでの大学院が専門書の講読や学術論文の書き方といった「学界の作法」を伝授する場とすれば、社会人向け大学院は実社会のできごとと一緒に考えて考える場といえる。先輩格の米国では、こうした「事例研究」が当たり前だろう。名門ジョージタウン大学の法科大学院は昨秋、クリントン大統領とのスキャンダルで一躍有名になったモニカ・ルインスキーさんをゲストの講師に招いた。テーマは「大統領の一連の事件に関する憲法上の問題について」だった」そうです。

記事検索をしていて出てきたものに、政策研究プログラムの大学院生と政治家のスキャンダルになった人のインタビューがアエラに掲載されていました。モニカ・ルインスキーさんではありませんが、そんなこともありました。詳しいことはお話ししませんが、アエラには掲載されておりますので、ご関心のある方はご自分で調べてみてください。

この天声人語はいい宣伝になりました。かといって、それほど急激に応募者が増えたわけでもありませんが、この天声人語は法政の大学院、あるいは社会人大学院がどういうものかを比較的分かりやすく説明しているのではないかと思います。

次に、政策研究プログラムを始めるにあたっていろいろと工夫したことをお話します。その1つが4期制です。具体的には、年間を4期にわけ、前期を前期前半と前期後半にわけ、1期1科目2単位制で、1年を通すと8単位になります。週に2日出席すれば16単位、2年間で32単位、卒業所要単位がほぼクリアできます。ただ、4期制を作った理由は、学内教員だけでは十分な政策研究に関する科目を充足することができないことが分かり、外部の先生に手伝ってもらわないとカリキュラムが組めないという状況でしたからです。時間割を見てもらえば分かります。

ようやく月曜日から土曜日の授業時間が埋まりました。政治学科の政策系教員は当然としても、政治学科でもあまり政策系とは言いづらい先生や法律学科の先生にも参加してもらい、知り合いの外部の先生を入れて何とかカリキュラムを手配したわけです。全て私が頭を下げてお願いした科目でした。中には、旧来の年間4単位にこだわる先生もいなかったのですが、そうした科目も許容することにしました。時間割をよく見たら金曜日の3期、4期は埋まっていません。そこは大目に見ていただければと思います。松下先生にもフルに担当していただきましたし、五十嵐先生は、頑張って4単位×2の8単位で科目を運営してもらいました。ただ五十嵐先生は、外部の人が多過ぎるということも言われ

ましたが、五十嵐ゼミの運営方法としては幅広く外部の人も加わって議論する、という私は理解です。私が木曜日、廣瀬先生も金曜日、法学部政治学科では成澤先生が生命政策研究という科目ですが、その当時、生命に関する研究をされていました。飯田先生は日本思想史・政治思想史の先生ですが、都市思想史という科目名でやっていただきました。法律学科の江橋崇先生は川崎市などで国際化を推進していた先生です。小島聡先生や私も参加して国際化の提案をしました。その提案の中に、外国人の職員採用も含まれていました。憲法の先生ですが、自治体国際政策をやっていただきました。また金子征史先生には雇用・労働政策研究をやっていただきました。国際政治系では1人、後藤先生に参加していただきました。

授業時間は、90分を2回やって回数を少なくするという理由で、180分授業にしました。180分7回で2単位です。現在は15回講義することが厳しく問われますが、この当時はそれほどでもなかったと思います。その後、2単位科目も8週間で15回を確保するという時間割を組み、そのおかげで8月になっても授業をやることになってしまいました。

### 1998年度の授業および授業時間

	I期 4-5月前期前半	II期 6-7月前期後半	III期 9-10月後期前半	IV期 11-12月後期後半
月曜 18:30-21:30	金子征史* 雇用・労働政策研究	江橋 崇* 自治体国際政策研究	衛藤幹子 福祉政策研究	成澤 光 生命政策研究
火曜 18:30-20:00	松下圭一 都市政策研究		松下圭一 政治政策論	
火曜 20:00-21:30	岡田 彰** 自治制度研究		岡田 彰** 行政改革研究	
水曜 18:30-21:30	五十嵐敬喜 立法学研究		五十嵐敬喜 公共事業研究	
木曜 18:30-21:30	森田朗** 行政システム研究	武藤博己 アドミニストレーション研究	武藤博己 政策過程研究	西尾 隆** コミュニティ政策研究
金曜 18:30-21:30	廣瀬克哉 情報政策研究	福岡峻治** 大都市システム研究	飯田泰三 都市思想史	辻山幸宣** 政府間関係研究
金曜 18:30-21:30	後藤一美*** 国際援助政策研究			
土曜 12:45-14:15	修士論文、リサーチ・ペーパー指導			
土曜 14:20-15:50	アドミニストレーション・ワークショップ		政策研究ワークショップ	

立法学研究・公共事業研究・ワークショップは4単位、他は2単位

\*印は兼任講師、\*\*印は非常勤講師、\*\*\*印は昼間開講の夜間科目

やがて、政策研究も参加者が 20 人台になり、私も次に述べる政策創造研究科に移籍したこともあり、政治学研究科の政策研究プログラムは若干衰退することになりました。その大きな理由は、2002 年に政策科学研究科が立ち上がったことが大きいと私は思っています。

2008 年から私は政策創造研究科に移るのですが、2007 年は、2006 年の夏から留学していたものですから、十分に設置準備委員会に参加することはできませんでした。ただ、メンバーは社会学部から労働法の権威である諏訪康雄さん、経済学の岡本義行さん、経済学で元お役人の小峰隆夫さん、経済学部から黒川和美さん、そして法学部の私と、3 学部から 5 人が集まって新しい大学院の研究科を作りました。法政大学ではなかったことではないかと思います。そういう意味では、面白い大学院になりました。しかも、後で出てきますが、学部がありません。そのため、早稲田大学や明治大学もそうですが、学部がない大学院は授業料がそれなりに高くなります。

さて、政策創造研究科の名称については、先ほど申し上げた大阪市立大学の創造都市研究科や関西大学に政策創造学部があり、大学院ではなかったことから政策創造研究科と決まりました。英語名は、**Regional Policy Design** で、日本語名とはずいぶんと意味が違います。特徴的なのは、静岡県静岡市にサテライトキャンパスを設置したことです。『日本で一番大切にしたい会社』の著書の坂本光司さんが静岡県で活動していたことからできたものです。私のところにも県庁から 2 名の方が来てくれて、1 人は学位を取って静岡県の大学に就職しています。

大学院の運営（経営）については、募集定員は 25 名で、移籍した教員 1 人 5 人ずつ集めろと言われました。幸いにして私はクリアできました。クリアできなくて困った先生もいたと思います。私のゼミ生は博士を含めると 10 名程度でしたが、坂本ゼミは一番多かったようです。ただ、坂本ゼミは静岡県で開いていたため、市ヶ谷キャンパスのビルでは一番広い教室で私がゼミをやっていました。学部がないことが授業料や学生募集に厳しい状況がありました。経営としては非常に難しい大学院です。

三つの学部から集まって新しい研究科を作ることは、意見の調整がなかなか難しく、結局は研究科長だった岡本さんの意見に従うことが多かったという記憶です。その後、政策創造研究科から公共政策研究科へ引っ越すことになるのですが、政策系の大学院が結構ありましたので、そこで統合しようという話が、平林千牧先生が総長のときからありました。私は、平林政権の総長補佐みたいなことをしていたので、この設置について何とかしろと言われて、増田総長時代にも継続して検討が進められました。そこで、資料を調べましたら、大学院改革作業部会最終報告第三次ドラフトというのがあり、そこには、「社会科学系チームでは、①政策系大学院の競合問題、②ビジネス系大学院の競合問題、③法学研究科と法務研究科（法科大学院）の役割分担・相互関係の問題、④経営学研究科キャリアデザイン学専攻の将来、⑤社会科学系大学院全体の再編」といった五つの問題を取り上げられ

ていました。ここでは①のみのお話いたします。

「①政策系大学院の競合問題に関しては、政策創造研究科（学部がない独立大学院）、政治学研究科、政策科学研究科、人間社会研究科福祉社会専攻の4者間で夜間プログラムの統合が可能かどうか話し合われてきた。4者が社会人向けの夜間プログラムを開講しているところから、相互に担当科目を持ち合い、政策系の大学院として再編する方向で検討を行うことになった」と述べられており、当時はまだ検討途中でした。

「これを受けて、理事直轄のプロジェクトが発足し2009年夏以降、検討が加えられた。外部講師なども呼びながら、どのように政策系大学院を統合するか」という議論が交されたわけです。結局、公共政策研究科が発足することになるのですが、「政治学の政策研究プログラム、社会学部の政策科学研究科、人間環境学部の環境マネジメント研究科の大学院を統合して」公共政策研究科ができました。政策創造とも統合しようとしたのですが、先生方の理解が得られなかったようです。私は10数人の大学院生とともに引っ越しをしました。院生にとっては、授業料が安くなるけれども、少し研究環境が変わることが不利だったということになります。

その公共政策研究科の設置準備委員会は2010年11月から始まりました。全部で17回開催されましたが、2011年3月11日の9時半から11時まで、東日本大震災の発災前に開催されました。この後、帰るときに苦勞した先生が何人かいらっしまったようです。この日、私は腰が痛くて欠席しており、4月11日に腰の手術を受けました。そのおかげで今は腰の問題が全くなくなりました。

次は公共政策研究科の名称についてです。私は、反対されるのではないかと考えていました。ところが、「新しい公共」という言葉が使われるようになり、「古い公共」は政府活動を意味していたわけです。今でも、公・共・私と言われるように、公は政府を指すことが一般的でした。そのため、公共政策研究科の科目の中には、民間企業のことも扱う環境マネジメントなどは反対するのではないかと考えたのですが、広い公共という概念を受け入れようではないかということでまとまりました。そして、公共マネジメントコース、市民社会ガバナンスコース、環境マネジメントコース、国際パートナーシップコースの4コースで始まりました。

基本的な考え方は、3研究科の統合であるので、実際の運営はコースごとで決める、コースは専攻と同じとスタンスを設置準備委員会の中で確認しました。したがって、入試も同日に実施しますが、それぞれのコース毎に実施し合格者を決定します。修了審査も、博士の審査も同様に、コース毎に判断し決定します。ただ、教授会で最終的な決定が必要ですので、それぞれのコースが提案をすることになりますが、各コースの決定を尊重して決まります。2012年3月17日に行われた「公共政策研究科専任予定者説明会」で明確にされたことですが、「日常的なコース運営はコース会議によるものとし」とされ、多くはコースごとに決めていきます。ただ、全体的な話もないわけではありませぬので、たとえば年

報（紀要）『公共政策志林』を刊行するといったことはその一環なので全員で議論をしました。

公共政策研究科を立ち上げる当時の大学院問題として、外国人コースや1年コースをどうするかなどについて、議論はしましたが、結論は出ませんでした。ただ、長期履修制度は導入しました。

修士論文とリサーチ・ペーパーについては、政治学ではリサーチ・ペーパーという手法を採っていなかったのをどうするかを研究科として議論しました。中筋先生が了承されました。また、指導教員の決め方について、ここで重要なことは、学生の希望を優先することにしました。ところが、指導教員の決定は入学後の話ですので、合格したコースと違うコースの先生を指定するという状況が時々ありました。そこで、引き受けてくれるかどうかという大きな問題が出てきたことはあります。

公共政策研究科長を最初の2年間は私がさせていただきましたが、そこで苦労した話です。最初は、『公共政策志林』の編集と投稿規定です。そもそも『公共政策志林』という名称は、『法学志林』と『社会学志林』があり、社会学部の先生方もたくさん所属していたものですから問題はありませぬ。環境マネジメントの先生方はどうか、そこが心配でしたが、『公共政策志林』という名称に賛成していただけたので、名称は確定しました。投稿規定や執筆要領は学問分野によって違うところもあるのですが、何とかまとまりました。なお、ホームページで見たところ、2023年の『公共政策志林』は12年目、第12号が編集途上であるとのことでした。

査読論文については、私が研究科長のときではなかったと思いますが、学位の前提として査読論文をどうするかが議論され、結果として査読論文2本が博士論文提出の条件となりました。1本は『公共政策志林』でもOKですが、もう1本は外部に投稿して論文として採用してもらおうというものでした。ここで「自治体学会」は松下先生、西尾勝先生、廣瀬先生が関わっていたところで、また私を含めた多くの先生が関わっておられました。また、日本公共政策学会の『公共政策研究』や行政管理研究センターの『行政管理研究』なども査読論文を受けてもらいました。

最後に、博士課程の受入人数ですが、2015年に問題となりました。私は大学院の博士後期の学生が一番多かったのが矢面に立たされました。ここで文科省から「大学院は定員管理が非常にいい加減だ」と批判され、「定員の4倍の博士学生を受け入れているとされた法政大学大学院」と書かれてしまいました。「4倍も？」と皆さん思うかもしれませんが、5名の4倍、20人ちょっとだったと思います。ただそれ以前、設置準備委員会の段階でも、法政大学の博士後期課程はこれまでみんな5人でした。全部の研究科が5人だったので、3つの研究科が集まったから15人にすればよかったです。5人のままだったので、こういうことになってしまいました。結果として15人に増やしましたが、このとき、ついでにですが、1人が受け持てる博士後期の院生は5名までと決まりました。私は十数人いた

のですが、大学院の入試で受け入れもできず、退学してもらったりして何とか5名に落ち着けたということがありました。

現在の状況は全く分かりませんが、これまで話してきたことに間違っているところもしありましたらお詫び申し上げます。私がなぜこんなに博士課程だけではなく大学院に関わったかと言うと、私はICUで社会科学系の博士の第1号だったという経験があります。第1号というのはなかなか大変で、私が申請をするとようやく教授会が動くようになって、とにかく博士の学位1号を授与されたのですが、これは辻清明という大先生がいたから取れたと思っております。

新しい学位は研究者としての証明で、従来の博士は、博士としての業績でした。新しい学位制度で学位を授与された私としては、そういう大学院に政治学研究科、政治学専攻も移っていかなければならないという信念がありました。中には、大学院に来ると就職ができなくなるからよくないといった考え方の先生もいらっしゃいましたが、徐々に変わって行って、大学院がそれなりの役割を果たす時代がやってきたということになります。

私としても、修士課程も頑張りましたが、博士後期課程でも頑張り、本日の出席者の中には学位を私のところで取ってくれた方々が何人かお見えでいらっしゃいます。その意味では、大学院で頑張ってきたことは成功だったと考えています。

私の話は以上です。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

## 司会

20年を超える期間の長いお話を丁寧にお話しいただきました。現役の学生さんも修了生の皆さんも、そして私もこの間の公共政策研究科の流れがよく分かり、このシステムが今このようにできていることを改めて実感しました。武藤先生、どうもありがとうございました。武藤先生にどうぞ皆さん、盛大な拍手をお願いします。

## 第 2 部 修了生によるパネルセッション

### 「先端の学び、研究、広がるつながり：法政大学大学院公共政策研究科の軌跡と展望」

#### パネリスト

田中 克弥（さいたま市職員）

中川 貴久美（駐日欧州連合代表部 政治・広報部）

中嶋 恵（台東区議会議員）

安原 淳子（OFFICE J・Y 代表）

コーディネーター 淵元 初姫（公共政策研究科教授）

#### 【淵元】

修了生とのパネルセッションを担当いたします、公共政策研究科の淵元と申します。よろしくお願ひします。（拍手）初めにパネリストの皆さまのご紹介です。

2007 年修了、OFFICE J・Y 代表、安原淳子さんです。

2018 年修了、さいたま市職員、田中克弥さんです。

2020 年修了、駐日欧州連合代表部政治・広報部の中川貴久美さんです。

同じく 2020 年修了、台東区議会議員中嶋恵さんです。

皆さま、どうぞよろしくお願ひします。こちらのセッションのテーマは、既にフライヤーの中でご案内のように、「先端の学び、研究、広がるつながり 法政大学大学院公共政策研究科の軌跡と展望」として開始します。当研究科で修士号を取得された皆さんから、大学院でのリスキング、学び、それが人生でどのように役に立ったのかということに興味を持ち、それについて詳しくお尋ねしてまいりたいと考えております。

ご報告は、お名前の五十音順で、田中さん、中川さん、中嶋さん、安原さんの順番でお願ひします。皆さんからは、お一人 10 分から 15 分ぐらいお話を頂く予定です。後半、セッションの時間が少しありますので質疑の時間を設けたいと思っています。それぞれのパネリストの方々のこれまでとこれからをお伺いしながら、今後の大学院における教育や研究を考えてまいりたいと思います。なお、本日は大学院進学をお考えの方もご来場していらっしゃることも伺っております。博士課程の在学生の皆さん、修士課程の在学生の皆さんと、教員の先生方もいらっしゃいますが、フロアの皆さまからぜひコメントやご質問をお寄せいただけますようお願いいたします。では、4 人の方、順番に報告、プレゼンテーションをお願ひします。まず、田中さん、お願ひします。



### 【田中】

こんにちは。2018年修了の田中克弥と申します。本日は貴重なお時間を頂きありがとうございます。少し緊張しておりますが、先ほど高田先生から「おかえりなさい」という言葉を頂いて少しホッとしているところです。テーマを頂いており、スライド3枚にまとめてきましたのでこちらについて発表します。

バブルがはじけて平成3年、1991年に埼玉県所沢市に生まれました。高校を卒業までの18年間ずっと野球をやっており、高校2年、3年のときに甲子園に出場しました。レギュラーというわけではなかったのですが、充実した野球人生だったと今は思っています。その後、何とか大学に入って法学を勉強するまでもなくずっと遊び続け、何とか公務員試験に受かって今のさいたま市役所に入庁することができました。

何を申し上げたいかと言うと、一切勉強をしてこなかったということで、何とか市役所に入庁したので業務を開始することになるのですが、最初に配属された危機管理部防災課で4年勤務します。こちらで防災の対策業務や防災の支援業務などに当たっていくわけですが、平成27年9月には関東・東北豪雨、鬼怒川の決壊を実体験したり、28年4月、後ほど述べます、修士論文のテーマにもなる熊本地震を支援する側で携わりました。関係者の方もいらっしゃるかもしれませんが、1年間、総務省の旧自治省系の地方財政関係の部署に派遣させていただきました。1年間勉強し、印象深いこととしては、財政健全化法を所管する課だったのですが、ここで、今の鈴木北海道知事が当時夕張市長だったとき、夕張市が再生団体になっていて、現場を案内していただいて、地方団体の職員が、市役所の職員でありながらも国の視点で再生団体だとどうなるのかを、デスクの上でもそうですが、現場を見せていただいたことでした。今は、市役所に戻っており、財政課勤務で今年5年目になります。令和6年度の当初予算に向けて今はまさに査定期間というところです。

「進学のカキカケ」ですが、先ほど述べたとおりずっと遊んでいたもので、市役所に入ったときの自分の実力不足、能力など、力不足をすごく感じていて、職場にいた先輩にそういった相談をすると、大学院という存在を教えていただいたのが、今思い返すときっかけ

なのかなと思います。

次に、今回のテーマである「先端の学び」です。修士に入ると、基本的には修士論文が中心になると思います。この修士論文について簡単にお話しします。研究テーマのところにもありますが、修士論文の中心にあったのは熊本地震での経験です。ご記憶がある方もいらっしゃるかと思いますが、避難所にモノをプッシュで送るわけですが、受け手側の熊本市や県がうまく受け入れられず、避難所の前にトラックがズラッと並ぶといった課題がありました。そこで、モノと人の受け入れについてすごく問題意識を持ったというところからです。私のテーマでは、モノよりも人のほうに注目して、自治体の受援計画、受入計画を事前に整備しておく必要があるのではないかとというのが問題意識としてありました。結論として、防災と統計学を大学で学び、防災と統計を掛け合わせて、応援職員を事前に予測して、それを元にした受援計画を各自治体が先に準備しておいて被災に備えるというようなことを提案というか、必要ではないかとうたった論文を書き上げたということです。

この論文は当然自分一人でできたわけではなくて、大きく二つの要素に支えていただいて論文を書き切ることができたと思っています。「充実した講義」、先ほども武藤先生からお話がありましたが、法政大学のサポート体制によって、社会人が受講するような講義で、先端の地方自治の基礎、最新のトレンド、研究手法などを教えていただいて基礎をかためました。2点目が、「武藤部屋」と書かせていただきましたが、武藤ゼミで修士論文の中間発表、進捗報告をする中で、分野の違う先輩方からいろいろ、あれは見たのか、これは見たのか、これはちゃんと調べているかとアドバイスを頂き、勉強していました。研究者の方は本当に、今思うと、お酒を飲まないとお話を話してくれないなと思います。昼間のゼミでは優しく、的確に指導いただくのですが、なぜかアルコールが入ると、「いやいや、違うんだ。ここはこういう考え方だ」など、強烈にご指導いただいて、頑張っって食らいつきながら。今覚えているのは、先生と飲み会するとき、酔っぱらいながら言われたことをノートにメモして食らいついていたような気がします。大きくこの二つの要素で論文を書き上げられたのではないかと、今振り返って思っているところです。

そして「広がるつながり」です。卒業後、勉強し続けることは当然のことながら、やはり強調したいのは、「広がり続ける先生、先輩方」のところですか。勉強維持よりも何より、社会人大学院というところでの出会いやご縁をすごく感じています。進学しなければ今いる、まさに皆さんと知り合うこともなければ、先輩方からお声をかけていただくこともなかったと思い、ここのつながりのほうが自分にとってはその後、すごく財産になっていると感じています。

次に「現場でのアカデミックな橋渡し」と生意気に書いていますが、具体的には、ここで学んだアカデミックな知識をなるべくこの現場にフィードバックしながら、何か、ここはまだもやっとしていますが、現場でどう生かしていったらいいのかなと思いつつ勉強しているところです。



先端の学び 基礎自治体×防災×統計  
働きながら学ぶ

**修士論文**

**現場での問題意識と修士論文**

- 東日本大震災以降の防災業務  
自主防災組織、防災システムの見直し
- 自治体間連携  
九都県市、指定都市市長会等の自治体間連携

**研究テーマ**

- 入学とほぼ同時に熊本地震発災  
熊本地震で新たに見えた課題とは？  
ヒト、モノの受入
- 受援体制の必要性  
事前に準備しておくこと
- 統計学との出会い  
講義できちんと統計学を学びなおす
- 防災×統計  
応援職員数は全壊棟数と重傷者数との相関  
⇒熊本地震を基に具体的に必要職員を数値化  
した自治体の受援計画策定を提案

**充実した講義**

著名な講師陣による講義

- 社会人が受講する講義
- 研究基礎  
地方自治の基礎、最新のトレンド
- 研修手法

**武藤部屋**

**途中経過報告**

- 論文報告での指摘

**分野の違う論文報告**

- 様々な視点からの指摘、白熱する議論

**研究者は酒豪**

- 酒気を帯びて、更に過熱する議論・指摘

最後になりますが、「進学をお考えの方」と、ややリクルートみたいなことを書いてしまっていますが、単純にうらやましいなと思っています。最先端の研究をされている先生方と週に何回も講義の回数だけざっくばらんに議論できて、また、社会人で問題意識を持った人たちとお話ししながら自分の意見をぶつけ合えるのは、今振り返ってみるととても充実していて、それを週に何回もできるのは単純に「いいな」と思っています。それが、この法政大学には備わっている、そろっている、準備していただいているのだなと思っています。

最後のコラムですが、今日のような機会が頂けることも、思い切って進学してみてよかったなと思うところです。そう思いつつ、10年間ずっと役人をしていてこのままでいいのかなと何となく漠然と思うことが最近多くて、今日こういった機会でご意見やコメントを頂けると自分のプラスに、糧になると思いますので、ざっくばらんにコメントを頂ければと思います。私からは以上です。ありがとうございました。(拍手)

### 【淵元】

田中さん、ありがとうございました。

非常に謙遜しながら、あまり勉強しなかったとおっしゃっていましたが、田中さんはキャリアのごく早い段階で大学院にいらっしゃいました。防災を担当されたことから問題意識を高めていらしたとのことで、それが修士論文のテーマになっているとお伺いしました。

ゼミは「武藤部屋」とのことです。先ほど基調講演でもお話を頂きましたが、研究科の中ではもちろん伝統的なゼミで、所属されている先輩方にとってもかわいがってもらったのではないかということも、大変刺激的な2年間だったのだなと考えておりました。ありがとうございます。では、次に中川さんをお願いします。



### 【中川】

皆さま、こんにちは。はじめまして。中川貴久美と申します。2020年に公共政策研究科サステナビリティ学修士を取得し現在、駐日欧州連合代表部の政治広報部で秘書をしております。本日は、修了生によるパネルセッションにお招きくださり、ありがとうございます。ほかのスピーカーの方の素晴らしい経歴に圧倒されて、少し場違いなようにも感じておりますが、少しでも私の経験が皆さまのお役に立てば幸いと存じます。また、このような光栄な機会を頂きありがとうございます。

まず、簡単に自己紹介いたします。私はアメリカの大学を経てアラブ首長国連邦のドバイにあるエミレーツ航空に就職しました。エミレーツ航空ではドバイを拠点に5年ほど国

際線に乗務しておりました。中東という場所柄のため、人やモノの、日本とは異なる動きを直接肌で感じる場面が多くありました。華やかな建設ラッシュの裏で 300 人もの外国人労働者を強制送還するフライトに乗務し、そのことが後に修士論文の研究テーマにつながりました。

法政大学大学院で過ごした 2 年の間に、現在のキャリアにつながるさまざまな能力を向上させることができました。例えば、自身に欠けていた学術的な知識を授業を通して得ることができました。フィールドスタディでは東北沖地震の被災地に実際に出向き、学部生と一緒に泊りがけで、現地で調査を行いました。被災された住民の方々や漁師さんからつらい経験を伺いながらのインタビューは難しいものではありませんでしたが、インタビューによって得られる生きた情報の重要性を再認識する貴重な体験となりました。さらに大きな学びであったのが、ゼミでの毎週行う発表と質疑応答です。一つ目は、自分自身の研究に対するフィードバックを受けたこと、二つ目は、ほかのゼミ生の研究に対して考え・意見を交わしたことです。その結果、修士論文の内容を向上させることができました。また、これらの全ての体験が自身の能力を向上させ現在につながっていると感じております。

つまり、客室乗務員としての体験のもとに、聞く力や考える力が修士取得の過程で養われ、物事をさまざまな方向から深く考えるようになりました。これらが歯車のようにかみ合い、人間的成長ができました。そのほか、社会人院生として得たものは、元環境省出身の恩師、藤倉先生の影響により、環境省で働くきっかけにつながったことです。そして、先にお話ししたような、大学院でしか得られなかった人間的、学術的成長により、自分の強みを生かせる新たな場にも挑戦できるようになり現在に至っております。

大学院を修了後は、欧州連合代表部への転職に成功し、学ぶ側から伝える側に、身につけた能力を生かせるようになりました。昨年 11 月には、ウクライナ侵攻に対する EU の対応について、ある講義に直属の上司である政治広報部長をゲストスピーカーとして呼びいただきました。その際、講義のスライドを作成したり、学生と交流する機会を得ました。その後、多数インターンの問い合わせも頂き、また偶然にも欧州留学フェアの会場は法政大学であることにもご縁を感じております。このように、さまざまなつながりが広がりました。

最後に、現在の自分があるのは、恩師藤倉先生の存在がとても大きいと感じております。論文指導だけではなく、藤倉ゼミの皆さまから受けたサポートや影響も大きく、現在もそのご縁は続いております。この場をお借りしてあらためて御礼申し上げます。藤倉先生とは、大学院の進学相談会で初めてお会いしました。そのため、ぜひ皆さまも進学相談会へ参加されることを強くお勧めいたします。また、修士論文について、ハードルが高いと感じている方がもしいらっしゃれば、藤倉先生の「研究すること」という論文がとても分かりやすく、私自身も論文を書く上で、迷ったときの道標となりましたので、お勧めいたします。詳しくは、法政大学学術機関リポジトリで検索していただければ無料でダウンロード

ドができます。それでは、皆さまによいご縁がありますようお願いしつつ、私の発表を終わらせていただきます。(拍手)

### 1.自己紹介

- 2006-2011 エミレーツ航空 ドバイベース 国際線客室乗務員
- 2011-2015 明治国際医療大学 鍼灸学部
- 2015-2017 駐日アラブ首長国連邦大使館 秘書
- 2018-2020 法政大学大学院 公共政策 サステナビリティ学専攻
- 外務省 期間業務職員
- 環境省 期間業務職員
- 2020-2022 赤十字国際委員会 駐日代表部 情報管理オフィサー
- 2022-現在 駐日欧州連合代表部 政治・広報部 秘書

恩師 藤倉教授からの影響 (環境省出身)

環境省 地球環境局 国際連携課 国際協力室

赤十字国際委員会

駐日欧州連合代表部 政治・広報部

G7サミットのオペレーション

広島平和記念式典 駐日代表の参列同伴

中・日・韓の環境大臣会合 TEMM 担当

外務省 (儀典課) 国際女性会議WAW! TICAD アフリカ開発会議

2019.11 第21回 TEMM 日本・北九州市

21日国連防災週間 (観) 小泉大臣 (観) 宇都宮 (中)

### 2.社会人院生としての学び、得たもの

現在に繋がる 成長

授業からの知識

研究 修士論文

フィールドトリップ 東北沖地震被災地

ゼミでの発表と 質疑応答

エミレーツ航空 ドバイでの生活

## 【淵元】

中川さん、ありがとうございました。

国際的に活躍されている様子を伺い、一気に世界が広がったような思いです。スライドの中で、歯車で表してくださった絵の中でも分かったように、一つ一つのご経験が着実に活かされて修士論文をおまとめになって、特に、キャビンアテンダントは聞く力と考える力をその中で養われ、後からの被災地でのフィールドワークにつながったりと、いろいろご経験が関連している様子がよく分かりました。

藤倉ゼミのご出身ですが、2年ほど前のシンポジウムでも藤倉先生は非常に熱心に研究指導をされているということで、中国で調査している学生さんをおたずねして指導されたなど、いろいろなこととお伺いしています。ゼミのことでも後からまたお尋ねできればありがたいと思います。ありがとうございました。それでは、次に中嶋さん、お願いします。



## 【中嶋】

こんにちは、中嶋恵と申します。よろしく申し上げます。

私は2020年に法政大学大学院公共政策研究科の公共マネジメントコースの修士課程を修了し、主に地域のつながりづくり、コミュニティについて研究をしてまいりました。出身は群馬県前橋市で、現在は東京都台東区に在住しており、台東区議会議員の2期目の所属となります。大学院在学中においては、議員ではなく会社員として民間企業で働きながら大学に通っておりました。仕事が終わってからこちらに6時半に着くように、週に3回ぐらい授業のコマを入れていた記憶があります。頑張っておりました。

大学院に入学したきっかけです。もともと私は港区に住んでいて、地域ボランティアや商店街イベントのお手伝い、まち歩き、地域新聞なども書いたりして、そういう取材、ライティングなどのお手伝いをしていくうちに、地元の人たちと徐々に人脈が広がってきました。そんな中、地域コミュニティの希薄さや休眠している町会があるといったことも伺いながら、地域コミュニティが縦社会であることを実感してきました。私も当時、地域活

性化やまちづくり関連の法人化、NPO 法人や一般社団など、そういったものやっていたい、仕事とは全然セクションが違うのですが、地域に沿った形のものもやりたいと思っていたのですが、法人化を進めるに当たっては知識がだいぶ不足していると感じて、そこで、専門性を高めるために勉強しようと思ったのがきっかけです。法政大学には地域コミュニティ学で有名な先生がいることを知って名和田先生のゼミへの入学を決意しました。

大学院の在籍前後の話を簡単にします。大学を卒業してから、民間企業に普通に就職をしました。ここでは、東証プライム企業と記載しておりますが、議員になった現在でも実は同企業に勤めており、会社員でもあります。公職休暇制度を使って休暇を取っている関係で、マスコミなど公の場所で企業名は伏せての報告になります。

そして、2018年に地域コミュニティ学を学ぶため、大学院に入学しました。当初は2年で修了しようとして1年目で授業の単位を取り切って、2年目で修論を仕上げるというプランだったのですが、急きょ議員になったので、初めての公務など、仕事がとても忙しくなってしまうと大学まで来ることがなかなかできず、2020年の3月修了も難しくなり間に合わないということで先生にも相談しながら半年留年の9月修了で論文を進めてまいりました。2019年、台東区議会議員に初当選し、今年4月の統一地方選挙で2期目の当選をしました。

ところで、港区で活動していたのになぜ台東区議会なのかと疑問に思った方もいらっしゃるかと思います。簡単に言うと、誘われたからです。その方に、中央区か台東区で議員が足りない、一緒に頑張らないかということで、当時、衆議院議員を目指した方からのお誘いでした。実は私も、会社で年齢的にもそろそろキャリアを目指さないかと、私は営業をやっていたものですから、上を目指すなら地方に行って数字を上げてこいといった雰囲気がありました。キャリアアップもそこまで興味はなかったのですが、そのときは東京を離れるのが残念だと思っていました。それで、東京を離れるぐらいだったら、港区から台東区だったら引っ越ししても問題ない、そんな感じで行動を起こしたというのが経緯です。私は港区麻布十番に住んでいたのですが、そのときに、名和田先生のゼミ、法学部の学部生を麻布十番商店街のまち歩き、フィールドワークの授業のお手伝いをしたことも思い出しました。経緯などは長くなるのでここでは割愛しますが、そのように、私は普通の会社員でありながらなぜそういうきっかけをつかんだのかと聞かれることが多いのですが、誘われたから、という形になります。

大学院を卒業してからは、社会人になってから学ぶことで時間の大切さをあらためて感じました。今まで出会った仲間や先生、友人も含めて、本当に私の財産です。在学時は自治体公務員の方や議員の方も多く在籍していたので、地域コミュニティを学ぶ上で生の声を身近に聞くことができたと思います。卒業してからは、こちらの市ヶ谷キャンパスに来ることが少なくなってしまうしましたが、本日のようなシンポジウム、こうした機会を与えてくださった先生方に感謝申し上げます。どうもありがとうございます。

## 大学院に入学したきっかけ



1

## 大学院在籍前後



2

最後に、休職制度についてお話しします。公職休暇制度は、もともと企業にはだいたいあるのですが、それが私の会社では使った人がいなくて、制度自体はあるけれども中身が全くありませんでした。そのため、私が作りました。人事、法務部とかに相談をして、こういうことをやるので1期4年間の任期中に会社員としての社会保険とか厚生年金とかはそのまま据え置きにさせていただいて、別の仕事をするための公職休暇制度という形でその制度を作ってもらいました。その制度を適用したのが私の企業では私が最初だったらしくて、その次に、袖ヶ浦市議会議員になった人が二人目が出ました。そのときに、袖ヶ浦市議会議員の方にいろいろ相談を受けたりしました。社内外問わずこういう珍しい制度を使った関係で、今までこの1期4年間働いていた中で8名ぐらいから相談がありました。もちろん

ん、その方は全員が全員議員になったわけではなかったのですが、すごく興味があるということで、都議会議員にチャレンジした人もいました。相談などを頂いた際には、私が役に立ったのかなと思っております。きちんと伝えられたかどうかは分かりませんが、会社によって制度の中身は違うので、やはり会社の人事部を通して相談したほうがいい、うちの会社はこういうことだけど、某銀行さんは違うなど、そのような流れでいろいろ相談を受けた経緯はありました。

また、進学相談会ですが、先ほど中川さんからもお話がありましたが、私も大学院に入るときには進学相談会に来ました。最初に相談に乗っていただいたのが淵元先生でした。ご縁があります。本当にお若くて女性の先生で、私はそのとき、すごく安心感がありました。そんなに年齢が変わらないのにもう大学の教授なんだ、すごいなど。私はもう本当に、そこに安心感があって、淵元先生のところで勉強させていただきたい、そんなふうに思いました。先ほど中川さんからもありましたが、大学院の進学を考えていらっしゃる方はぜひ、進学相談会などで相談をするとよいかと思いますので、私からもお勧めし、私のお話とさせていただきます。ご清聴いただきありがとうございます。（拍手）

### 【淵元】

中嶋さん、ありがとうございます。

最後に公職休暇制度など、補足していただいたこと、恐れ入ります。中嶋さんのキャリアは大学院在籍中に、入っていらっしゃる前と後で、大きく変化しました。教員もびっくりしました。「中嶋さんが選挙に出るらしい」ということで非常に驚きながらも、その後のご活躍をずっと楽しみにしています。転身に伴って、お勤めの会社の制度を動かし、第1号となったということが大変大きなことかなと思います。公共マネジメントコースは、政治家の方や議員さん、議長の方などがたくさんいらっしゃいますが、そこからどういう刺激を中嶋さんが得て、また、中嶋さんが与えてくださっているのかなというのも非常に興味深いと思います。ありがとうございます。それでは、安原さん、お願いします。



### 【安原】

こんにちは、安原淳子と申します。よろしくお願いします。

前の3人の方が若くて、パワフルに、パワポもちゃんと使いながらたくさんやっていますが、私は実は、こちらの大学を2001年に入学し、それから大学院まで行き、卒業したのが何と2006年ということで、皆さんに比べると20年近くキャリアが違うのですが、年の功ということで、マイペースでやらさせていただきます。

まず自己紹介からです。私は中嶋さんと同じ台東区浅草に住んでおり、ずっとあの辺です。一時期、20年か25年ぐらい世田谷区の山の手のほうにお嫁に行っていました、空気が合わなかったか水が合わなかったか、戻ってまいりました。高校は女子校で、大学もあるのですが、どうも大学に行く気になれず、大学がついているのになぜかデザイン学校に行きました。ただ、デザイン学校に行ってもちょっと合わないなということで結局は就職をするのですが、最初に就職したのが外資系の化粧品会社です。そこで恋に落ちて結婚し子どもを産み、産休を少し取っている間にその外資の会社が本国に引き上げてしまい、子育ての時間が2年半ほどありました。子育てをしている間も、世田谷区の区民大学などに、子どもを自転車に乗せて通っており楽しい勉強もしたのですが、その後は、前の会社の上司だった方が起業し、その創業社員として自然派の化粧品を日本で立ち上げるということで一緒に参戦することになります。そこで長いこと仕事をするのですが、そのときの問題点がやはり、女性が長く、普通に働ける会社というのがなかなかないですね。

私は、大学で終わろうと思ったのですが、どうも物足りない。何かやり残したいというところに宮川先生から「大学院に行ったら？ 勉強になるよ」お声をかけていただき、大学院に行くことにしました。そしてそこで学んだのは、今までずっと悶々としてきた、女性が働く、子どもをどう育てていくのか、企業の中で何が足りないのか、政策には何を持ちかけたらいいのかといったことをもろもろ考えていたのですが、それを形にするのが大学院での修士論文でまとめられるのではないかとまとめることになりました。

ただ、私の欠点は、パワポとか理数系の統計などがものすごく苦手で、これも宮川先生

におんぶにだっこでやり方を紹介していただきました。実は私、論文を書くのに、働く女性の1200人ぐらいのアンケートを取りました。企業も12社ほど回りました。この2年間に一応それだけの企業を回って実態を見て、女性の仕事の悩みを聞いて、何をどうしたらいいのかをまとめながらこの論文に行き着きまとめ上げたわけなのですが、結果的に言うと、女性は甘えているということが正直なところですよ。

求めることが多過ぎる。あれして、これして。旦那様やご実家、お父さん、お母さんにもそうなのかもしれないですが、やはり「やってほしい」という要求が非常に多い。だけど、「あなたは何をしているの？」というのを私は最終的にどうしても言いたくなります。要するに、自分の幸せとかやりがいとか、キャリアもそうですが、それは自分で作るしかありません。これは人に求めて、作ってもらってやってもらってそこに乗ってということではないと思います。まず、いい人生、楽しい人生、幸せな生活を自らの人生の中にとどめておきたい、送りたいというのであれば、まず自分が苦勞をして、自分が身をもって働いて、自分が作ったもので最終的には幸せになれるのではないかなと私は思います。もちろん、求めること、声として出すことは絶対に必要なことです。なぜなら、言わないことは聞こえない。言わないことは絶対に直りません。だから、どんどん声を出して言うことは必要なことです。必要なことですが、言うだけではなく、自分も動きましょうということですよ。

私はもちろん働くのが好きで動いていたのですが、子どもを産んでから次の仕事、起業と一緒に立ち上げたときには保育園に行くのですが、ベビーシッターを、すぐ近くに大学があり、その大学の回覧板みたいなのに出しました。それがとてもいい人が来てくれて、卒業すると次の二年生、三年生と、申し送りでどんどんやってくれて4年間娘はその大学の人たちにかわいく見守ってもらって育ちました。そのおかげで私はほとんど起業のときは、365日・24時間近く働いておりました。皆さん、とにかく楽しい人生を、素敵な人生を歩んでください。そのためにはまず、自分が動くこと、自分が働くことをぜひ忘れないでください、ということをや、身をもって申し上げたいと思います。

さて、これは何なのということですが、よく言うのですが、結局この真ん中のBのところ、人間の本質、あり方、自己啓発と書いてあるのですが、やはりこれが一番大事な部分かなと。社員になったりだんだんと社会人にと自分でなっていくものなのですが、結局この部分で形成されるものは、人間の本来の優しさ、個性など、いろいろなものにつながってくるのですが、大学のときに私はすごく宮川先生からお言葉を頂いてうれしかったのが、「ダブルスクールのすすめ」です。これは、大学で勉強して学ぶだけではなく、何かもう一つ身につくことを習ってみたらいいということだと思います。

そこで私は、心理学系の産業カウンセラーの資格をまず取りに行きました。これは1年間、週に1~2回学校に行きました。それでその資格を取り、そこから心理相談者とかいろいろなものに派生して、東京都の第三者福祉協議会といったところにも入らせていただい

たりとか、そこからどんどん広がっていきました。勉強して何か資格を取ったり自分に身につくようなものを何か持っていくと、そこからどんどん派生していき、楽しさがいっぱい広がりますから、この「ダブルスクールのすすめ」もぜひやっていただきたいと思います。あと、食べることの資格はほとんどのものを持っています。今流行っている野菜ソムリエ、お魚マイスターなど、とにかくいろいろなありとあらゆるものを取り、おいしく食べて楽しく飲んでということを実践しております。

まず皆さん、自分がどんどん楽しい自分になるようにいろいろなことをしてどんどん成長して頑張ってくださいと思います。ありがとうございました。(拍手)

### 【溯元】

安原さん、ありがとうございました。

出身ゼミの宮川先生にはフロアにもお越しいただいています。安原さんは、2006年修了なので、その後のご活躍、今の自己紹介の中で頂いたことを越えて持っていらっしゃる資格のお話だとか、そのあたりも詳しくまた伺ってみたいと思いました。ありがとうございました。

それでは、4人の方々からそれぞれお話を頂いたところで、少し質疑やコメントを頂ければと思います。私からもいろいろお尋ねしたいです。例えば、進学相談会のお話は中川さんから中嶋さんから頂いたのですが、なぜ法政大学を選ばれたのか、お仕事の中で先輩から法政大学大学院があると勧められたということがありますが、法政大学を選ばれた理由。進学相談会に来て、例えば藤倉先生が座っていらっしゃった、そういう偶然とか、そういうものもあると思いますが、聞いてみたいです。また、皆さん、大学院を修了されてしばらくたったときに振り返った今、大学院に求めること、こんな仕組みがあったらうれしかったとか、そういうご要望のようなものがあたらとも思います。

おそらくフロアの皆さんからもご質問や、今の話を受けたコメントがあると思いますのでいかがですか。パネリストの方からお答えを頂くことが面白いかなと思いますので、よろしければお願いします。



## 質疑

### 【質問者 1】

4名の先輩の方々、ありがとうございました。私は公共政策研究科博士課程2年の者です。4名の皆さんのお話を聞くと、やはり学びから自分の世界が広がっていったというのが共通のお話だったかなと思っております。

皆さんは、自分の中で問いを作り独創的な形で答えを出して修論を出し、卒業されたということで、そういったお話はそれぞれありましたが、4名の方がそこから得たもの、何か今につながっていることなど、皆さんにもう少し言いたいことがあればお願いします。

### 【田中】

自分で問いを出して、そこについて何を得たかというご趣旨だと思います。自分の場合は先に防災の現場での課題感がありました。具体的には、技術的な話で言えば、学んでいなかった統計学を学ぶことができたことは技術的なこととしてあって、その先には、自分が書いたものが、現場で使えるものに少しはなったのではないか、フィードバックできたのではないかなど。それを使っているところがあるかは別として、それを文字にすることができたのではないか、そこでの思考過程は現場に帰った今も大事にしている経験です。

市役所の業務と研究者とは、今回のシンポジウムを受けて考え直してみると、先人がやってきたことをもう一度研究・勉強し直して、そこに自分が少しプラスアルファする、市役所の業務もそういうことが多かったです。前の人たちはどのようにやっていたか、自分がどうプラスアルファかというような思考、リズムに思い当たるようなこと、そのように考えるようになったかなと思います。

### 【中川】

問いによって得たものは、端的に言えば、先ほども申し上げましたが、ゼミで毎週発表と質疑応答が行われて、同じゼミ生から受けるフィードバックや発表の過程でだんだん磨かれていき、一人ではできない安心した学術的な場が提供されたことによって、なおかつ、藤倉先生という舵を取ってくださる方もいらっしゃって、いろいろな問いに対する答えを導き出せたという経験ができたことが大きいと思います。それは、現在の仕事にもつながっています。欧州連合ではディスカッションが多いので、法政大学大学院のときに経験できたディスカッションの経験が、今の職場でも自然にできて意見を言えたり、そういう経験につながっています。

### 【安原】

私は現在、OFFICE J・Y という個人の事務所を立ち上げています。だいたい地方が多

いですが、福島、宮城など、地方の職員研修を主にやっています。私が修士論文でまとめたものがだいたい基になっています。つまり私は、何を教えるかより、誰が教えるかのほうが大事ではないか、人の力はすごく強く大きいと思うので、人間力をもっと重要視してほしいというところを、この論文の中から全部引っ張り出しても、やはりそこに行き着いてしまいます。

2年間でやって作った論文の時間はとてもハードで、仕事をしながらでしたから難しかったのですが、やはりそれだけの価値がものすごくありました。また、今の仕事の「教える」ということに対しても基盤が、ここに集約されているという気がすごくします。ですから、つらかったですが、いい時間を頂いたと思います。

### 【中嶋】

私の場合は、先ほど淵元先生からもあったとおり、一緒に学んでいた学友の中で、現職の議員や元議員の方が身近にいました。私はそのときは普通のOLだったので、どんな仕事をしているのかなど、授業が終わった後に飲みに行ったときなどに仕事の話をついいろいろ伺った経緯がありました。そういった中、私の論文はコミュニティを学ぶというそのベースがあったので、とにかく人脈で、さまざまところから広げていろいろな方のお知恵をどんどん蓄積していった自分のものにしよう、そういったことをこの2年間で学んだような気がします。

もともと大学院に入ったときには議員になろうとは全く思っていませんでした。たまたま置かれた環境、お友達に議員がいたとか、そういったところから影響されてというのもあったかと思います。その中で、先ほどもスライドの中で申し上げたとおり、やはり友達、先生、出会ったみんなは本当に私の財産となりましたので、そこが、私が法政大学大学院を出たことの一番の財産で、今後も宝物にしていきたいと思っています。

### 【淵元】

問いを立てるといって、研究に一番重要なことをベースに質問していただき、それぞれ答えていただくとやはり、多様な交流の中で自分の問いが鍛えられたとか、自分の研究は一人でやったものではなくて、先輩方や学友の方との交流の中でできたという、やはり多様なもの、異質なものに触れないといけないのだなと勉強になりました。ありがとうございます。

### 【質問者2】

公共政策研究科博士課程を昨年修了した者です。今、東海大学で教員をしています。私ももともと国家公務員だったので、仕事があつて忙しかったのもあるのですが、それ以上に、私の場合、大学院に通うときに職場の理解を得るのが結構大変だったという印象があ

ります。結局、ほとんど隠し通したような感じで私は通学したのですが、4名の皆さん、どのように職場とはお付き合いされていたのか、逆に、こうやって話すと職場でも通学しやすくなるとか、これから大学院に通うことを考える方はたぶんそこが一番ネックかなと思うので、お聞きしてみたいです。

### 【田中】

実は私も、職場には黙って行きました。職場では今も、大学院を出たことを積極的には言っていないです。そんなやつが橋渡ししたいなんていうパワポを作っているのですが（笑）。正直言うとあまり言っていないでそっと通いました。たぶん皆さんいろいろあるかと思いますが、私は言う機会もなく、積極的に言わなかったというのが結果なのですが。そのため、災害対応があると夜の講義に行けないとか、遅刻したこともあって、ちょっともったいないなと思いながら、しょうがないなと自分でも割り切る中で通学したのを覚えています。

### 【中川】

私の場合は、当時はアラブ首長国連邦大使館で勤務しており、そのときの上司の勧めもあって大学院に進むことにしました。そして、その当時の私の目標は国際機関で働くことでしたので、私の場合はいったん退職をして大学院に進んだのですが、ちょうど期間業務という形で外務省で並行して国際会議のお仕事もしたり、キャリアの幅を広げることにつながりました。ちょうどタイミングよく春休みや夏休みに外務省の期間業務のお仕事の話を受けて、例えばWAWという女性国際会議、TICADというアフリカの国々が関係する国際会議が日本で開催される年で、ちょうどその全てがうまくかみ合って、修士も取れたし外務省や環境省での業務で仕事の経験も積めて、それがあったので今の仕事の転職が成功したという形になりました。

### 【安原】

私は個人事務所で自営業みたいなものですから、いかように時間を作れたので、その心配は全くなく、学業優先で2年間みっちり勉強させていただきました。これはラッキーなことだと思います。その前に、しっかり勉強してしっかり働いておりますので。

### 【中嶋】

私の場合は民間企業で、ちょうどその頃、働き方改革等で残業を減らそうといった試みがあり、早く上がれる日を決めて通うのは全然問題なかったです。その代わりに、残業する日は残業するというメリハリがある1週間を送っていました。そのときに上司などに、「大学院に行くことになって」と言ったら、「よく受かったね。頑張ってるね」と、そんな反応で

した。「通えるの？ 大丈夫なの？」「何を研究するの？」とかいろいろ聞かれた記憶があります。だから私の場合は逆で、どちらかといえば結構オープンにして、この日とこの日は早く帰るという形で、自分のペースで仕事も勉強も進めていました。

### 【安原】

大学のときの同期の男性で消防に行っている人がいるのですが、その当時彼はファイヤーマンよりもレスキューをやっていました。男の人は優しいのか何というのか、やはり同じことを言っていました。言いづらい。職場には言いづらい。でも、その彼は、奥さんがものすごく分かってきているのでお尻を叩いて行かせてくれたからいいようなもので、と言っていました。やはり奥さんが味方になってくれればいいんじゃないですか。

やはり男の人は優しいと思う。でも、少しだけ、一番信頼している上司とかには言っただけいいのではないかと思います。所属長か、一番信頼している人に味方を作るのがまず大事かなと私は思います。そこで、少しだけでも、自分がいけないことをしているみたいなどころから逃れられるのではないかと思いますので、ぜひ、いい人に相談をしてください。

### 【淵元】

安原さん、ありがとうございます。先ほどの、女性の働き方、子育てとの両立なども、プライベートと職場との両立など、皆さん調整しながらいらして下さって、修士論文を書いている最中にお子さんが生まれたとか、そういうお話も伺います。

私は居場所づくりの研究をしていて、自分の研究に引き付けてしまうのですが、大学院は、社会人の方々にとっては第三の居場所だと今日あらためて思いました。第一の居場所が家庭、第二の居場所が会社やご所属の企業などで、それを越えた第三の居場所に皆さん集まってきて下さって、ちょっと家庭や会社では話せないようなことを議論するという、先ほどの問いの話もそうでしたが、そんな新たな刺激の場として居場所を作って皆さんがこうやって集まって下さったことが、今のお話を伺っても非常によく分かり、ありがたいと思いました。

さて、そろそろお時間です。本日は 70 分間、皆さんどうもありがとうございました。4 人のパネリストの方々にあらためてお礼申し上げます。(拍手)

### 第3部 クロージングセッション

進行 小島 聡（公共政策研究科教授）

登壇者 廣瀬 克哉（法政大学総長）

中筋 直哉（公共政策研究科教授）



#### 【小島】

まず、私事から申し上げますが、今日は武藤先生から初めて聞く話がたくさんありました。武藤先生と私は年齢がちょうど一回り違います。学生時代からお世話になっている私にとっては師であり、一回り違う兄貴でもあります。この社会人大学院の軌跡については私も武藤先生から断片的には聞いていたのですが、90年のイギリスへの留学が、アイデアが浮かぶきっかけだったことを初めて伺いました。

その意味でも、今日の武藤先生のお話は、法政大学のヒストリーとして残さなければいけないと感じました。特に、武藤先生ご自身の半生のかなり部分は、社会人教育に捧げたということも初めて知りました。ICU（国際基督教大学）の新しい学位制度、称号としての博士ではなく資格としての博士の第1号が武藤先生であり、そして、そのような学位のあり方を法政でずっと模索されてきたということです。あらためて武藤先生の業績のお話を伺っていて私自身が感じたことは、実務家としての政策系人材を育成しながら、法政大学における博士という学位のあり方を革新されたということです。たぶん私が学生だった頃は称号としての学位だったのですが、武藤先生は資格としての学位へと、法政大学における博士課程のイメージを変えたのだと思います。高度職業人というと、通常は修士修了者をイメージするわけですが、博士号を持った高度職業人という新たな人材像を、武藤先

生は数多く生み出したことをあらためて実感いたしました。

さて今日は「回顧と展望」ですが、ここまでは主に回顧でしたのでここからは展望に入りたいと思います。とはいえ、ゼミは飲みニケーションの場だったとか、洒落た言葉を使えばサードプレイスなのかもしれませんが、いろいろな思い出があるはずです。そこでまず、お二人から、ご自身の思い出も含めて今日の感想をお願いしたいと思います。廣瀬先生は法政大学全体を見る立場にもありますが、公共政策研究科の教員の立場に戻っていただいて、いかがでしょうか。

### 【廣瀬】

武藤先生から、1998年に政策研究プログラム（HPS）がスタートするその前からのヒストリー、そしてこの公共政策研究科に再編・統合されてこういう形になることも含めて、あらためてまとめてお話を伺いました。後半の部分は私も当事者として関わっていたのですが、HPSのスタートは、こういうのを作ろうということ、おそらく松下先生からゴーサインが出たぐらいから共有していると思います。その前の部分についてはあまり聞いたことはありませんでした。これは録音をして文字起こしをする準備はされていたと思いますので、何らかの形で記録になると思っています。

修了生の皆さんの話も伺いました。大学院は、同じ目的を持ってさまざまな立場の、年齢も性別も業界も違う人たちが、ここでできる学びに関心を持ち、指導教員としてどの先生の下で学ぼうかというときに、何らかの共通した関心があって指導教員を選んで、そこでゼミ、先ほどの話では「武藤部屋」と呼ばれるものができている。もちろん、ごく少数の人が深く対話をしながら学ぶということもあると思いますが、ある程度以上の人数の人がいて、そこに一定の多様性があって、しかし共通する項目があり、もう一つの共通要素として、それぞれが自分のテーマを持って研究論文の構想を立てながら交流する、それは非常にシリアスな、あるいは時としてシビアな交流もあるかもしれないし、これと両立するのもかもしれませんが、普段のときは一定の節度ある相互の建設的な批判をし合いながら、インフォーマルな場になればなるほど、飲み会の場などでは割と遠慮なくシビアなことも含めて交流する。刺激度は後半のほうが多いけど、難点は終わって帰ってみるとあまり覚えていないとか、そういうこともあるかもしれません。ただ刺激を受けた記憶は残るし、それにより一定のモチベーション形成や、それと同時にそこで自分なりのコミュニケーションスタイルがさらにレベルアップすることもあるのではないかと思います。

中嶋さんがそうでしたが、それ以外にも、議員になってからこの大学に来る人ももちろんいるのですが、この大学院に入ってから在籍中に選挙に出て当選した人も過去に何人かいます。特に新人議員が当選するためには、自分が何か思いがあって議員に出るのでしょう。だけど、有権者はそんな一人一人の候補者のことにそれほど真剣に向き合う義務も責任もないです。それをどれだけ多くの人に届けるかというときにやはり、いろいろなこ

と、自分の思っていること、大学院ではそれを研究として一定の形にしていくために、こう思うということに対して詰めが甘かったら甘いと言われるし、どこが分からないかといったことも「これ、何を言いたいわけ？」とストレートに問い返されることもあるかもしれない。そういうことの中で自分なりの思いを一定、形にしていく、磨いていくことをやりながら、知らず知らずのうちに、公共政策研究科は政治家になるためのコミュニケーションを磨く場であるということは少なくとも第一の目的ではないですが、結果的にはそういうことも磨かれていったのではないかと思います。いずれにしてもそれは、立候補して有権者にアピールするためだけに有用なことではなくて、いろいろな場面で、人とコミュニケーションを取るということ、そのコミュニケーションが、単なる雑談とか気持ちの上で一緒に盛り上がるということだけではなく、学位論文を仕上げていくという目的に向けてそれぞれの個性が交錯し合う場で磨かれていくコミュニケーションだからまた別の場面でも、ある種、実のあるコミュニケーションのスキルとして磨かれていくのではないかと思います。

大学院生、特に博士の学位を取った人はやはり、いい意味ではない、悪い意味でのオタク的な捉えられ方をします。オタクというのは、悪い意味のときは、自分の関心があることについてはとことん深いことをドーっと話すけれど、相手が聞いているか聞いていないかには関心がなくて、自分が語り切ることに専ら目的がある人といったイメージがありますが、たぶん大学院のゼミで行われていることはそうではないコミュニケーションだと思います。一定の、非常にピンポイントのことをやたら深く知っているという意味でオタク的であるかもしれませんが、そこでは、いわゆるステレオタイプのオタクイメージのコミュニケーションではなく、実のあるコミュニケーションをしながらそのピンポイントの深いものについて、それ自体に特に関心はないけれども、「人がそういうことに関心を持つことは面白い」ぐらいの共感をしている仲間と、そこを深く見ていることで得られることについて何か共通した理解を得たり、分かり合いながら交流ができる、そういう力は磨かれていくのではないかと思います。これは、とても汎用的な力だと思うし、そのピンポイントのことに直接携わる仕事をしていなくても、たぶん相当生きると思います。そういうことの力を、社会的にも認識してもらえらるきっかけを作っていくことが必要でしょう。現に、そういう面で活躍している方が先ほどここに4人、非常に面白かったし、なるほどと思えて説得力もあるし、そういうことを話せる人を選ぼうと思って選んでいるのですが、でもほかにもいっぱい候補はいたということだと思っています。そういうことを今日は例示的にこの場で皆さんと共有できたのではないかと、そんなことを思いました。

### 【小島】

武藤先生が、社会人大学院を作ろうとしたときに、松下圭一先生に言ったら「そんなことで苦勞することはない」といわれた。やめておけという意味ですね。しかし、今の廣瀬

先生のお話を聞いて気づきました。それは、研究テーマを通して個を確立するプロセスを共有しながら市民社会をつくる挑戦でもあった。コミュニティをつくるともいえますが、松下先生は「広場」という言葉をずっとお使いになっていました。

今の廣瀬先生のお話からも、公共政策研究科は市民の広場、市民社会、松下先生が提唱してきた都市型社会を大学院において育む実験をしてきた、その結果、多くの修了生が、市民的に成熟し、専門的能力と汎用的能力を身につけて、現在、様々な場所で活躍されているということです。その意味で、松下先生は「やめておけ」とおっしゃったかもしれませんが、松下先生の理想はちゃんと公共政策研究科で実現したと感じました。では続いて中筋先生、お願いします。

### 【中筋】

政策研究コースの教員をしています中筋と申します。ここに小島先生と廣瀬先生と私とありますが、私が一番若輩で、かつ、キャリアが一番短いのですが、私がここに座っているのは、本研究科の1つのパーツである政策研究コースは元は政策科学研究科といい、さらに発足当初は政策科学専攻といいました。その発足当初から今までののが私だけだからです。

政策科学専攻が2001年に発足したとき、私はこの法政大学に採用されました。そのときはもう松下先生はご退職されていましたが、私は社会学部で法学部ではないのですが、松下圭一のいる法政大学の政策に関わる大学院で教えるというのはものすごい緊張感がありました。松下先生はやはりすごい憧れというか、雲の上の存在でした。でも、実際に来てみると、もう松下先生はいらっしゃらなくて。でも、松下先生がどういうことを考えてこの社会人の大学院を作られたのかを間接的に伺うことが多く、いつかその話を含めて、そのビジョンにつられて実際にそれを実現された武藤先生のご経験をまとめて聞きたいという夢や欲望というものがずっとあったのですが、それが今日果たされて、とても満足した気持ちでいます。

今どきの言葉で言うとレガシーでしょうか。私たちの世界、大学の世界は意外とレガシーを大事にしないところがあって、どんどん改革をしたり、人が入れ替わったりするので、レガシーはなかなかできないように思うのですが、今日は、私たちのこの社会人大学院のレガシーを作る瞬間に出会えたのではないかと思います。

やや脱線しますが、奈良に唐招提寺がありますね。あの唐招提寺の一番大事なものは、エンタシスの柱ではなくて鑑真和上坐像なのです。そのようなものを私たちは今手に入れたという気がしました。

修了生の方のお話を伺っていて、私のゼミにもそういう人がいたな、そういう方はいなかったなど、いろいろ思い出すことがあります。あえて一つだけ付け加えますと、今日の方はみんな努力してよい成果を上げて修了された方です。でも実際には、うまくいかな

かったり、指導教員とぶつかって別の先生に移ったり、いろいろな失敗経験があったと思います。それは、僕が一番能力のない教員だったからそうだったのかもしれませんが。それも含めて、私たちのこの 25 年、あるいは 20 年間の成果だったように思います。たぶん、うまくいかなかった、あまりちゃんと勉強できなかったといった経験も、どこかで交流できたり、話し合えたりすると、それもまたレガシーの一つになっていくのではないかと思います。

### 【小島】

どうもありがとうございます。レガシーですね。

大学院のまちづくり都市政策セミナーのはじまりは 1977 年で、そのときの経緯に関する資料が大学院事務課の倉庫に眠っています。今年が第 48 回でもうすぐ 50 回、以前は 1 年に 2 回やっていたので、あと数年で 50 周年です。立ち上げのプロジェクトチームには松下先生が入っていらっしゃいます。最初はゼミ形式でやっていたようです。都内の公務員のみなさんが「松下ゼミ」に入っていました。つまり、その頃から、法政大学は社会人教育の種をまいて、その後、社会人大学院へと発展していった。レガシーは 70 年代まで遡ることができると思います。

さて次はこれからの展望です。タイトルには「ミッション」と書いてあります。これから、この公共政策研究科が政策系人材をどのように輩出し、あるいはどのような社会的な役割を果たしていくべきかということを考えていきたいと思います。

### 【廣瀬】

これはいろいろなところでよく言われているのですが、例えば、東証プライム企業で取締役の人たちの学位について、製造業の中でメーカー系だと技術系で経営層に上がってこられた方の中に博士を持っている方ももちろんいらっしゃるのですが、国際比較をすると、大学院での学位を持っている方の比率は極めて低く、おおむね学士です。

最近だんだん、特に技術系や研究開発職の人から、やはり大学院でしっかりと学んだ経験がある人が必要だ、現状ではわが社には足りていない、日本社会に足りていないという危機感までは共有されるようになってきているように感じます。ではなぜそれが期待したように増えていかないのか。例えば、経団連が旗を振って大学の国大協、私大連など、いろいろな大学関係団体とも産学連携協議会を今作ってずっと議論をしています。その中で、社会人が大学院で学ぶことが大きなテーマの柱の一つです。ただそのときに、そこにいらっしゃる経団連側の人知らないことは、さっき出てきた話ですが、うちでは社会人の大学院生、人文社会系だけでも博士を得ていく人も少なからずいます。毎年コンスタントにいます。そして少なからぬ人が、職場には言わないで来ています。その現実をご存じですかと。

おそらく、トップの経営層は、意欲的に学ぶ大学院生が自分たちの社員の中にいることは、それは見どころがあるとか、大いに推奨したいと思っているかもしれない。ただ、直属の上司や同じ部署の仲間たちがどう思うかといえば、この会社のために、このチームのために働くことより自分が学ぶことを優先する人なんだなという認識で遇されることに対する懸念がおそらくある。それだけではないかもしれません。中にはもっと厳しく、邪魔してくる上司もいると聞いています。そういう人ではなくても、何となくの雰囲気として、やはりそこはもう自分のプライベートのこととして線を引いておいたほうが懸念なく大学院に通いやすいということがある、というようなことを、企業側もそこに危機感を持って対応しないとあなた方が求める人材は社会の中からどんどん育ってくることにはならないのではないですかと問いかけると、「非常に新鮮な問題提起を頂きました」とかそういうリップサービスだけはしてもらえますのですが、そこから後、何がどう変わったのかはちょっと見えてきません。

ただ、結果的にやはり、いろいろと力を発揮してくれて、すごく頼りになる人が出てきた、あるポジションまで上がったときに初めて、この人はいつの間にか大学院で学位を取っていたんだということが分かることを重ねていくうちに今の処遇が本当に変わり得るのではないかと感じています。と同時に今は、背中を押してくれる上司はもちろんそのほうがありがたいに決まっていますが、上司が背中を押してくれなさそうであっても自分でそういうことを制度として認めるべきだとか、空文化している制度があればそれをこうやったら具体化できるよと動くこともとても大事なのですが、自分としてはもう自分でまず切り開いてから回りを説得するぐらいの構えで来ていただくしかないという現実も一面で残っているとは思っています。

他方でわれわれは、ここで学んでいった人がいかに、どんな力を身につけているかとか、こんなふうに活躍している、それを職場に対してはまだ知らせていない人の分までは身バレするといけないのでそこは配慮をしながらですが、やはりそうやって育った人材の活躍ぶりの成果をもっと外に向けて。われわれ法政大学の大学院で内々で、「うちで育っていった人が、ほらあそこで学長になったよ」とか、このグループの25年間の卒業生の中には、ある公立大学の学長をやっている人もいるのですが、そういうような成果を、内々で満足していないで、内輪で盛り上がっているだけではなくて、外に向けてもう少し強くアピールをしていくことを通して、その後には続けたいと思う人を育てていく。内実をちゃんと作ることを重んじるのが法政としての伝統のようですが、そこをもう一步、殻を破ることも要るのかなと思っており、それが私の課題だと思っています。

## 【小島】

確かにそうですね。隠れて大学院に通う、別に悪いことをしているわけではないのですが。大きな産官学の話し合いだけではなくて、企業や自治体などと、法政大学はこういう

人材を送り出しているといった対話があってもいいでしょうし、廣瀬先生がおっしゃったように発信をしていく、そのためには、OB、OGの情報を組織的に把握していくことも課題ですね。

中筋先生、これからのミッションについていかがですか。

### 【中筋】

授業などで、ソーシャルキャピタルということをよく聞かれたと思います。先ほど、修了生の皆さんのお話を聞いていると、これこそがソーシャルキャピタルなんだとすごく腑に落ちます。このソーシャルキャピタルがここにこうやってできたのだけど、これをこれからどうやって生かしていくかといったときに、このソーシャルキャピタルをまず私たちが、この研究科が活用する。例えばゲスト講師に来てもらう、それこそゼミを任せて運営してもらうなど、さまざまな形で修了生の方の蓄積を生かすということがあって、それはやがて、これは廣瀬先生への領海侵犯ですが、大学で生かすとか、そしてもっと広く日本社会で生かす。小島先生がおっしゃってくださったことですが、私たちは、こんなソーシャルキャピタルを築き上げてきたということを発信し、どんどん使っていく、使わせていただくということが今後のミッションだと思います。

### 【小島】

大学院の広報では、最高のサードプレイスがありますといったプロモーションは行っていませんよね。教員は学位を取得させるというところにまず頭が行ってしまうのですが、ソーシャルキャピタルを育む、そのことによってジェネリックスキルを身につけられる最高のサードプレイスが法政大学大学院公共政策研究科にあります、というプロモーションがあってもよいのではないのでしょうか。これは教員だけではなかなか出てこない発想ですから、今日は、事務の方々も参加されていますので、院生も交えて、新たな広報戦略を考えていければと思います。

それでは、お待たせしました。他の先生方はいかがでしょうか。

### 【土山】（公共政策研究科教授）

かつて学部生で、大学院の修了生で、今教員の土山です。

社会人という多様な方が来られている中で、論文としてもものを書いていくということ、特に引用・出典といった作法やロジカルな考え方など、そういうことをしっかり伝えるところが非常に重要になってきます。他方で、政策というものの領域の幅広さから言うと、その幅広さを教員集団でどうやって受け止めるかがポイントになってくると思います。

また、他大学の社会人を受け入れている研究科と比べて、本学は博士を受け入れているというところが多いので、そうすると、また公共政策と掲げているからには、多様な背景

を持つ院生のやはり多様な研究対象というニーズに応えるというところで、教員にもそれに対応する難しさがあり、教員指導の個人のスキルを越えて組織的に支える必要があるのかなと思います。カリキュラムで論文を作成することの支援と、テーマの多様性に教員集団としてどう対応していくのかというところと、そうした大学院の意義や価値を社会に対してどう伝えていくかが求められます。

やはり、内緒で通わなければいけないというのはなかなかつらいですね。大学としては堂々と言いながら来てほしくて、「あの人、かっこよかったな。自分もああなりたいな」と思ってもらいたいわけで、そういうことを大学として、大学院で学んで培う能力を、必要な力なんだと伝えていく。例えば海外に調査に行つて公務員の方に会つと、アジア、ヨーロッパ関係なく、大学院を出た公務員、自治体職員が相当にいらつしゃつて、こういう方といろいろ切磋琢磨していくときに負けないというか、応えていける人材を育てなければならないという時に、公共政策という幅広いニーズの中で、カリキュラムとしての支援と、教員集団としての多様性も持つていくこと、そして、そこに通う人がもっと堂々と通えるようになること、さらに、社会人をたくさん受け入れている大学院の特性として、学部から上がってくる学生との交流の良さなど、そのあたりに配慮しながら進めていくことが重要と考えます。すごく難しいなとは思いますが、ぜひここがより大事だと思つているとか、こういうことを考えているとか、網羅的にお答えいただかなくてもいいのですが、ここを大事に思つていますということをご頂けるとうれしいと思つていながら伺つておりました。

### 【小島】

ありがとうございます。先ほど廣瀬先生が「アジェンダ」とおっしゃいました。研究者養成コースだと「こういうテーマをやりたい」と言つたら「それはものにならないから」と、変更を促す判断も働くと思うのですが、社会人大学院にはいろいろなものが持ち込まれてきます。そのような時、研究者集団にとって、そういうものも研究テーマにできるかもしれない、あるいは、仕立て上げなければいけないと、自分たちが問われることになるので、常に柔軟な思考を心がけなければいけません。

昔、武藤先生の研究室に、先生の研究テーマとは関係のない本が置いてあつたので聞いてみると、「今度こういう院生が入つてきたので、ちょっと勉強しないといけないんだよね」とおっしゃつていました。それはつまり、私たち自身が柔軟な頭を持って世の中を見ていかなければいけない、しかし、そうはいつても限界があるから、みんなで向かい合つていきましょう、ということだと思います。

高田先生、研究科長として、何かこれからのミッションについて、一言いただきたいのですが。

## 【高田】（公共政策研究科長）

土山先生に最後の締めにあつたお話を頂いたので僕の出番はもうないとホッとしていたところでした。

先ほどの4人の修了生のお話を聞いて率直に感じたのですが、この大学院を通してセンサーが磨かれるとか、スコープが広がっていくとか、もっと言えば、パワーが増幅する、テンションがアップする、あるいはフェーズを変える、そういうものを僕は感じました。それを裏返すのが大学院のミッションだと思います。そういう環境であり続ける。あり続けるということは、変化をするとところと変化をしないところの両面がたぶんあると思うのですが、外の変化に惑わされずに変化をしない面と、外は変わらなくても変化を続けなければいけない面があるのだと思います。それがわれわれのミッションなのかなと思いました。

それともう一つ、土山先生のお話から受けたのですが、やはり多様であることを、どのようにメリットにつなげていくか。多様であればあるほどメリットが高まる研究科にどうなっていくかというのも重要なミッションではないかと思います。

大変シンプルなコメントで恐縮です。

## 【小島】

後ほどの懇親会もワークショップだと思っていただいて、みなさん方からも何かあれば、高田研究科長に集約をしていただければと思います。

このイベントの企画案について谷本先生と高田先生から伺ったときに、いろいろな意味を込めましょうとお伝えしました。大学院のまちづくり都市政策セミナーにはOB、OGの方々も参加されていますが、大学院にもホームカミングデーが必要なのではないかと思います。そして、今日はそのような機会にもなったと思います。

ミッションというか、具体的なアクションとして考えなくてはいけないのは、「学びなおし」という言葉がありますが、やはり卒後教育ではないでしょうか。大学院に2年間ないしは3年間在籍して終わりではなくて、その後も、どういう形で学び続けることを支援できるのかという卒後教育のあり方、「学びなおし」から「学び続ける」ことへの支援や場の提供ということです。

政策系人材の交流がまさにそうですし、廣瀬先生がおっしゃったように、それを通して、少しずつネットワークを広げていく。かつ、土山先生のお話にあった学部教育との関係では、政策系人材のみなさん方は、学部生にとっては最高の教師になりえます。法政大学にとっては、政策系人材は学部教育にとっても貴重な人的支援になりえる。そういうことを通しても何か卒後教育について考えられるのではないのでしょうか。

最後に、武藤先生が初代公共政策研究科長になられて、最初の教授会で演説をされた時のことをご紹介します。武藤先生は覚えていらっしゃるかもしれませんが、「この研究科を日本の公共政策研究科にしましょう」とおっしゃいました。大学院棟の202教室だ

ったと思います。日本一になったかどうかは分かりませんが、日本有数の公共政策研究科になったことは間違いないだろうと思います。

変化し続けながら変化しないという言葉がありましたが、日本有数の公共政策研究科、武藤先生が礎を築かれたこの研究科を、みなさんと共にさらに次のステージに引き上げていきましょう。

これで終わります。どうもありがとうございました。(拍手)



---

**法政大学大学院 公共政策研究科 2023 公開シンポジウム報告書**  
**未来を拓く政策系人材～法政大学大学院公共政策研究科のミッション～**

2023年11月25日（土）開催  
於 法政大学市ヶ谷キャンパス  
法政大学大学院 公共政策研究科

---